〈資料紹介〉

高瀬真卿『いつまで草』（上）

古宇田　亮修

はじめに

新聞発行者、自由民権運動の活動家、政治小説・史談作家、監獄教誨師、東京感化院の創業者、刀剣鑑定の専門家というように、明治から大正にかけて種々の領域でその才能を発揮した高瀬真卿（一八五五―一九二四）については、二〇一一年に刊行された長沼友兄著『近代日本の感化事業のさきがけ――高瀬真卿と東京感化院』（淑徳選書1、淑徳大学長谷川仏教文化研究所）により、その全体像が初めて学問的に論述されたといえる。長沼氏は、長年にわたる資料探索により、高瀬真卿の御子孫宅に伝わる膨大な一次資料群の存在を突きとめ、それらを活用して同書を完成させたという経緯がある。そして、それらの資料群は、二〇一〇年末には「高瀬真卿関係資料」という名で淑徳大学アーカイブズに寄贈されるに至っている。その資料点数は、断簡も数えれば、一五〇〇点（うち書簡が約六〇〇点弱）以上にも及ぶものである。目録作成は二〇一一年より開始したが、寄贈も数次にわたって追加されたこともあり、全体の目録は現時点では完成に至っていない。

淑徳大学アーカイブズでは、「高瀬真卿関係資料」のうち、最も重要度が高いと考えられる高瀬自筆の日記を翻刻し、〈淑徳大学アーカイブズ叢書〉のうちに、二〇一二年より全五冊の予定で刊行を始めている。[1]

長沼氏[2]によると、「高瀬真卿日記」は全二八冊から成り、時期としては一八八二年（明治一五）九月から一九二四年（大正一三）一一月におよび、高瀬真卿の年齢でいえば、数えで二八歳から七〇歳までの長期にわたるものである。

一方、新聞記者時代から速筆で鳴らした高瀬は、家族・親族関係や感化院を始めとする諸事業関係の記述を中心とするこの「高瀬真卿日記」とは別の形でも、自身の行動に関する記録を残していた。旅行に出かけた際には、「旅日記」という形で記録[3]し、また、一九〇三年（明治三六）から一九〇七年（明治四〇）頃には、本稿で紹介する「いつまで草」という日記風随想を書いている。

この「いつまで草」は、高瀬が創刊した『刀剣と歴史』の第八五号（一九一七年（大正六）一〇月）から、死去（一一月一七日）の月に発行された第一六七号（一九二四年（大正一三）一一月）まで、数号の休載を除いて、約七年間にわたり連載されたものである。すなわち、高瀬は一九〇三年（明治三六）二月五日から一九〇六年（明治三九）九月二九日に記した「いつまで草」を、約一〇年の間隔を経て、抄録ではあるが公開を開始するに至ったのである。

今回、ここに公開するのは、一九〇三年（明治三六）・〇四年（明治三七）の記述に当たる二ヵ年分、三五回にわたり『刀剣と歴史』に掲載されたものである。詳細は、次頁に掲げた表を参照されたい。

〈表１〉高瀬真卿『いつまで草』（上）一覧

No.	記載時期	掲載誌（全て『刀剣と歴史』）	本稿頁
1	明治 36 年 2 月 5 日～	第 85 号，大正 6 年 10 月	p. 9
2	明治 36 年 2 月 22 日～	第 86 号，大正 6 年 11 月	p. 14
3	明治 36 年 3 月 12 日～	第 87 号，大正 6 年 12 月	p. 19
4	明治 36 年 3 月 22 日～	第 88 号，大正 7 年 1 月	p. 23
5	明治 36 年 4 月 23 日～	第 89 号，大正 7 年 2 月	p. 27
6	明治 36 年 5 月 13 日～	第 90 号，大正 7 年 3 月	p. 32
7	明治 36 年 7 月 10 日～	第 91 号，大正 7 年 4 月	p. 35
8	明治 36 年 6 月 19 日～	第 93 号，大正 7 年 6 月	p. 42
9	明治 36 年 7 月 6 日～	第 94 号，大正 7 年 7 月	p. 47
10	明治 36 年 8 月 13 日～	第 95 号，大正 7 年 8 月	p. 51
11	明治 36 年 8 月 21 日～	第 96 号，大正 7 年 9 月	p. 56
12	明治 36 年 9 月 1 日～	第 97 号，大正 7 年 10 月	p. 60
13	明治 36 年 9 月 13 日～	第 98 号，大正 7 年 11 月	p. 65
14	明治 36 年 9 月 20 日～	第 99 号，大正 7 年 12 月	p. 69
15	明治 36 年 9 月 28 日～	第 100 号，大正 8 年 1 月	p. 73
16	明治 36 年 10 月 18 日～	第 101 号，大正 8 年 2 月	p. 77
17	明治 36 年 11 月 3 日～	第 102 号，大正 8 年 3 月	p. 82
18	明治 36 年 11 月 18 日～	第 103 号，大正 8 年 4 月	p. 87
19	明治 36 年 12 月 28 日～	第 104 号，大正 8 年 5 月	p. 91
20	明治 37 年 2 月 12 日～	第 105 号，大正 8 年 6 月	p. 96
21	明治 37 年 3 月 6 日～	第 107 号，大正 8 年 8 月	p. 100
22	明治 37 年 3 月 21 日～	第 108 号，大正 8 年 9 月	p. 104
23	明治 37 年 4 月 1 日～	第 109 号，大正 8 年 10 月	p. 109
24	明治 37 年 4 月 17 日～	第 110 号，大正 8 年 11 月	p. 114
25	明治 37 年 5 月 1 日～	第 111 号，大正 8 年 12 月	p. 119
26	明治 37 年 5 月 15 日～	第 112 号，大正 9 年 1 月	p. 123
27	明治 37 年 5 月 22 日～	第 113 号，大正 9 年 2 月	p. 127
28	明治 37 年 6 月 2 日～	第 114 号，大正 9 年 3 月	p. 131
29	明治 37 年 6 月 11 日～	第 115 号，大正 9 年 4 月	p. 134
30	明治 37 年 6 月 28 日～	第 116 号，大正 9 年 5 月	p. 138
31	明治 37 年 10 月 23 日～	第 117 号，大正 9 年 6 月	p. 143
32	明治 37 年 11 月 3 日～	第 118 号，大正 9 年 7 月	p. 147
33	明治 37 年 11 月 11 日～	第 119 号，大正 9 年 8 月	p. 151
34	明治 37 年 11 月 18 日～	第 120 号，大正 9 年 9 月	p. 155
35	明治 37 年 12 月 11 日～	第 121 号，大正 9 年 10 月	p. 159

「いつまで草」は、刀剣鑑定の専門家としての高瀬を知る上で第一級の資料であることはいうまでもないが、高瀬が交流した人物の説明やその交流の内容に言及する記述を多く含むこと、ならびに活字資料ゆえの情報量の多さを勘案すると、今後、高瀬真卿の活動を知る際には、「高瀬真卿日記」と「いつまで草」を対照して読み解くという作業が基本となるものと考えられる。「いつまで草」は、確かに時期的に限定された資料であるが、別の時期に交流した人物、たとえば東京感化院の職員として活躍した竹内樸卿[4]、高山樹堂[5]、清水橘村[6]等への言及を含むという点で、感化事業史の観点からしても無視することはできないであろう[7]。

また、高瀬は、一九〇二年（明治三五）一二月に東京感化院の院長職を長男の紹卿に譲り、再び出版事業にも乗りだし、会社を二社設立している。すなわち、五車堂[8]ならびに中外図書局がそれであり、高瀬はそこから著書も出版しているが[9]、本稿に掲載した部分では、その経営の様子もしばしば描かれている。

尚、「高瀬真卿関係資料」には、高瀬自筆の原稿類が多数含まれるが、現在のところ「いつまで草」の原稿に当たる資料は見つかっていない。それは同時に、一九〇六年（明治三九）九月三〇日以降の「いつまで草」[10]の所在が不詳であることを意味する。

註

（1）長沼友兄編『高瀬真卿日記　一』〈淑徳大学アーカイブズ叢書〉、淑徳大学アーカイブズ、二〇一二年、『同　二』二〇一三年、『同　三』二〇一四年、『同　四』二〇一五年。

（2）長沼友兄「〈解説〉高瀬真卿日記について」『高瀬真卿日記　一』、淑徳大学アーカイブズ、二〇一二年、vii～xxvii頁。

（3）活字化されているものとして「九州行記」『刀剣と歴史』第九二号、一九一八年五月所収、「東北の旅」『刀剣と歴史』第一〇八号、一九一九年九月所収がある。
（4）本稿、一一〇頁、一〇七頁、一五二頁参照。
（5）本稿、一〇四頁参照。
（6）本稿、二八頁、四八頁、一六〇頁参照。
（7）一九〇四年（明治三七）二月一六日に起きた東京感化院の火災に関する記載もある。本稿、九七～九八頁参照。
（8）本稿、三二頁、三三頁、八八頁、八九頁、一一五頁等参照。
（9）高瀬真卿『修身一夕話　全』五車堂書房、一九〇三年。高瀬真卿『感化読本　全』五車堂書房、一九〇三年。高瀬真卿述『道歌講談』五車堂株式会社、一九〇四年。羽皐高瀬真卿『（故老実歴）水戸史談――附・きのふの夢』株式会社中外図書局、一九〇五年。
（10）「いつまで草」の冒頭には、一九〇七年（明治四〇）頃まで記したことが述べられているが、末尾の正確な日付は不詳である（『刀剣と歴史』第八五号、本稿、九頁参照）。

（当研究所専任研究員）

凡　例

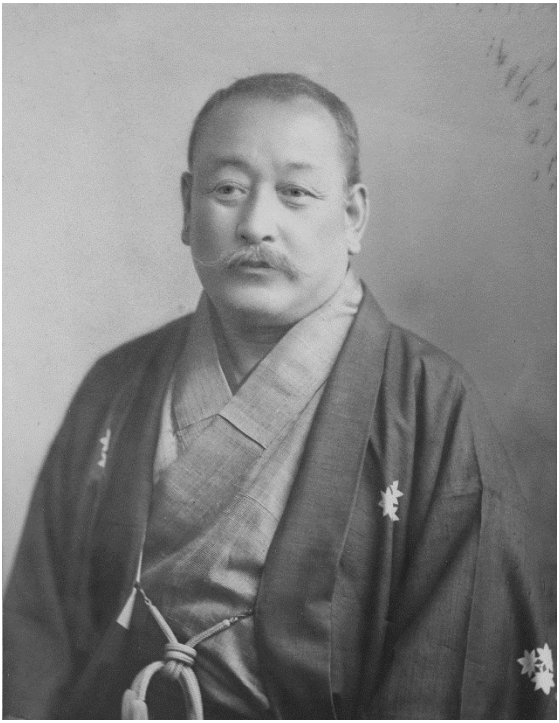
一、底本には、当研究所所蔵本を用いた。底本をデジタル化した上で、マイクロソフト社のＷＯＲＤ上でレイアウトし、版下を作成したため、スキャニング画像やレイアウトの不備は、筆者が全て責任を負うものである。尚、当研究所が所蔵する『刀剣と歴史』（創刊号から三五〇冊余り）は、おそらく一人の所有者の保管に成るものと推測されるほど保存状態が良好であり、その点で作業が比較的容易であったことを付しておく。

一、底本のルビは、著者のものというよりは、印刷所の組版職人が付したものと思われ、誤りも散見されるが、当否の判断が不可能な箇所も多いので、原本通りとした。

一、底本には今日の人権上の観点からすると不適切と考えられる表現もあるが、資料の歴史的価値に鑑み、原本通りとした。

『刀剣と歴史』

〈淑徳大学長谷川仏教文化研究所所蔵〉



高 瀬 真 卿
(1855-1924)

〈淑徳大学アーカイブズ所蔵，撮影年不詳〉